

市場から世界をみれば

ISG 情報システム株式会社 大谷淳一



第23回「水が足りない！」

環境破壊といった多種多様な問題に絡んでいて、もはや「海の向こうの国」の問題ではなく、目の前に迫り来る、私たちの生存権をかけた問題になってきている。

人口の増加や温暖化などによる環境の変化が、どれほど消費されているかは想像を絶する。一方、1キの小麦を生産するのに必要な水は約1トといわれている。肉食の普及は、水の問題に直結するのだ。また、魚の養殖も同様の問題を抱えている。養殖魚を育てるには、牛などと同様に飼料が必要となる。量は魚の種類によつて大きく異なるため、一概には言えないが、魚を育てるのにもやはり「水」が必要なのである。ここで問題となるのが、

日常茶飯事となっている。そう遠くない将来、いよいよ水争奪戦は始まっている。本草では、水をめぐる争いの諸相を見ていこう。

そもそも、「水」とは地球の上には、常に13億8600万立方キの水が存在している。しかしその大部分(97.5%)が海、塩水湖、塩分の多い地下水帯の塩水である。残り2.5%が淡水であるが、その3分の2以上が雪、氷、氷河、そして永久凍土の中に閉じこめられている。人間が使用でき、技術的に利用できる淡水は、きわめてわずかな量にすぎない。

1キの大豆の生産に必要な水の量は、1100ト。
1キの牛肉の生産に必要な水の量は、1650ト。
1キの米の生産に必要な水の量は、1900ト。
1キの鳥肉の生産に必要な水の量は、3500ト。

1キの牛肉の生産に必要な水の量は、1万5000ト。
（水の世界地図「食糧のための水」より引用）

前項でも触れたが、注目すべきは、肉の生産になると水の使用量が一気に目に見えてくる。食糧の生産に、いったいどれくらいの水が必要となっているのであろうか。

1キのジャガイモの生産に必要な水の量は、500ト。
1キの小麦の生産に必要な水の量は、900ト。
1キのとうもろこしの生産に必要な水の量は、1000ト。

日本の「水」は、中国を中心とした外国企業に買収されている。実は日本の水源地が日本のものでなくなっている。日本にある水なのに、日本人は使うことができず、飲むこともできない時代が来る。そんな「嘘のよう」な話を、皆さんはご存知だろうか。

世界的に食糧確保を困難にしている。だが、私たちが自らの首を絞めている面もある。それは、食生活が肉食化したことと、養殖化が進んだことが原因だ。

たとえば、牛肉1キを生産するために必要な穀物飼料の量は10キ前後とされている。豚の場合、約7キ、鳥で約4キの飼料を要する。この飼料を生産するた

地球の地表にある水は、常に循環している。まず水は、太陽の熱により陸地や海洋などから蒸発し、水蒸気となって大気に放出され雲を形成する。その雲が雨を降らせ、陸地にもある程度降り注ぐ。その雨が川を流れ、あるものは地下にたまり、大地に実りを与え、この「水の循環」が、人間の生存を約束しているのである。

ところが、食糧として水を考えてみると、アンバランスであることが一目で見えてくる。食糧の生産に、いったいどれくらいの水が必要となっているのであろうか。

1キのジャガイモの生産に必要な水の量は、500ト。
1キの小麦の生産に必要な水の量は、900ト。
1キのとうもろこしの生産に必要な水の量は、1000ト。

1キの牛肉の生産に必要な水の量は、1650ト。
1キの鳥肉の生産に必要な水の量は、3500ト。

1キの米の生産に必要な水の量は、1900ト。

1キのジャガイモの生産に必要な水の量は、500ト。
1キの小麦の生産に必要な水の量は、900ト。
1キのとうもろこしの生産に必要な水の量は、1000ト。

1キの牛肉の生産に必要な水の量は、1650ト。
1キの鳥肉の生産に必要な水の量は、3500ト。

1キの米の生産に必要な水の量は、1900ト。